

夫とともに、いま第二の人生を。

和歌山教会 木下越代さん

木下越代さんは26歳で結婚。長男を授かり親子水入らずの生活は、和歌山県の夫の実家で姑との同居から歯車が狂っていった。炊事、掃除、洗濯、慣れない農作業…すべてに注がれる姑の冷やかな視線に耐えられず、同居して18年、49歳のとき、夫と長男を残して家を出た。岡山、大阪、香川、徳島と各地を転々とし、7年後、郷里の山口県で「心穏やかに生きていこう」と生活を始めた矢先、原因不明の過呼吸の症状にたびたび襲われるようになる。死への不安が募り、思い悩むなかで、姑のこと、残してきた夫、子供のこと…そして、これまでの生き方を振り返った。自分だけが苦勞を背負っていたと思い込んでいたが、その間違いに気づくと夫に詫びたい強い思いで、長男に電話。心の内を素直に明かした。平成18年、夫と復縁。親戚のなかには快く思わない人もいたが、夫と長男は一軒一軒まわって頭を下げてくれた。「これからは夫と二人で小さな喜びや幸せをかみしめながら、人生を歩んでいきたい」と語る越代さんは、人生の新たなスタート地点に立ったところだ。



人生を厳肅なものに

「人生を厳肅なものに」というテーマですが、そもそも一人ひとりの一生は、「生まれる・老いる・病む・死ぬ」のどこをとってみても厳肅以外の何ものでもありません。意識していないだけで、私たちはみな厳肅な人生を歩んでいるのです。そうすると、そのことを明らかに知る、真理を自覚して生きることが、人生を厳肅なものにする鍵といえそうです。

ただ、「厳肅」を辞書で引くと「おごそかで心が引き締まるさま」とあり、そうした気持ちを常にもちつづけるとなると、堅苦しくて「とてもそのようには生きられない」という気がしてしまいます。だからでしょうか、ある方はきわめてわかりやすく「厳肅とは、無常観むじょうかんに立つて、いまを大切に生きること」といわれています。一日を、二時間を、そしていま目の前の一分一秒をおろそかにしないで、ていねいに暮らすことが大切なのです。

そのように捉えると心に余裕が生まれますから、気持ちもゆったりと落ち着いて穏やかにになり、まわりの人も仲よく、楽しくすごせます。そういう時間の積み重ねが、幸せで、かつ厳肅な人生といえるのでしょうか。